

# それ臨床工学技士にやらせてください！ ～タスクシフトを“先導”手術機能UPへの挑戦！！～

## I.はじめに

当院では、2021年のロボット支援手術装置導入にあたり、臨床工学技士（以下、CE）が手術室へ本格的に介入を始めた。2023年のある手術室運営委員会にて院長より「健全経営達成のために手術件数UPを！」との目標が示された。そこでCEが貢献できることはないかと検討した結果、鏡視下手術における内視鏡用ビデオカメラの保持及び視野確保のための操作が業務範囲となったことに着目し、タスクシフト/シェアの推進に取り組むこととした。

## II.背景

当院では、複数の診療科において鏡視下手術が行われている。その中で婦人科は、医師が1人体制であり腹腔鏡下手術の際、他科の医師や研修医にスコープオペレーターを依頼しており診療科全体で問題となっていた。そこで婦人科でのスコープオペレーターの開始が、間接的に手術件数UPへつなぐと考え介入を開始した。

## III.方法

業務開始に伴って想定される問題点の抽出・分析を行った結果、①病院見学、②知識の習得、③関係部署との調整、④院内規定の整備、⑤院内資格制度の確立、⑥初症例と手順を明確化したうえで進めた。婦人科では2023年11月に初症例を実施し、その後外科からも介入依頼があったため、同様の手順のもと2024年4月に外科でも初症例実施となった。

## IV.結果

介入開始から約1年で、婦人科手術で46件・345時間、外科手術で65件・282時間のタスクシフトが実現できた。医師の人件費に換算すると500万円相当の経費節減効果となり、手術件数は前年より2.1%UPであった。取り組みを行った外科では8%UPとなり、副次的な効果として内視鏡関連故障を4件発見し、修理費用を90万円相当削減することが出来た。

## V.考察

CEと手術室との関係性が構築されていたことで、現場スタッフから全面的な協力を得ることが出来スムーズなタスクシフト/シェアへ繋がった。また、CEがスコープオペレーターとして介入することで、手術室の効率的運用が行えた場面もあり、手術件数UPへ間接的に貢献できたのだと考える。副次的な効果として手術室への介入開始から行っていた、修理抑制への取り組みによりスコープの使用前後点検が可能となり修理費用削減へ繋げることが出来た。

## 引用文献

なし